

詩篇 137 篇

《バビロンでの悲哀》

- 1 バビロンの川のほとり、そこで、私たちはすわり、シオンを思い出して泣いた。
- 2 その柳の木々に私たちは立琴を掛けた。
- 3 それは、私たちを捕らえ移した者たちが、そこで、私たちに歌を求め、私たちを苦しめる者たちが、興を求めて、「シオンの歌を一つ歌え」と言ったからだ。

《エルサレムの懐古》

- 4 私たちがどうして、異国の地にあつて主の歌を歌えようか。
- 5 エルサレムよ。もしも、私がおまえを忘れたら、私の右手がその巧みさを忘れるように。
- 6 もしも、私がおまえを思い出さず、私がエルサレムを最上の喜びにもまさってたたえないなら、私の舌が上あごについてしまうように。

《報復の願い》

- 7 主よ。エルサレムの日に、「破壊せよ、破壊せよ、その基までも」と言ったエドムの子らを思い出してください。
- 8 バビロンの娘よ。荒れ果てた者よ。おまえの私たちへの仕打ちを、おまえに仕返す人は、なんと幸いなことよ。
- 9 おまえの子どもたちを捕らえ、岩に打ちつける人は、なんと幸いなことよ。

本篇は最も解釈が難しい詩と言っても過言ではありません。敵を激しく呪うことばで締め括られる内容を、福音に生きようとする者はどのように読めばいいのでしょうか。

あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と言われている。しかし、私は言うておく。悪人に手向かってはならない。誰かがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。

(マタイ 5:38-39)

この主イエスの教えと本篇との整合性を取るために、いくつかの試みがなされてきました。

- ①旧約と新約を非連続的なものと捉える
- ②新約は旧約を超えていると単純に捉える
- ③旧約では同態復讐法が許容されていると捉える

主イエスが旧約聖書の成就者として来られたと理解するとき、本篇をどのように解釈すべきであるか、長年考えてきました。ここでは筆者の現時点での理解を綴らせていただきます。まずはそれに先立ち、御言葉そのものを読み解いてまいりましょう。

1～3節：バビロンでの悲哀

まっすぐに読めば、本篇はユダヤの民がバビロンで捕囚とされていた紀元前586～539年の間のどこかで書かれたと思われます。少しひねると、詩人が帰国後に当時の様子を回顧して書いたとも理解できるかもしれません。

「川」(נַחַל／ナハロト)は複数形の名詞なので、ティグリス川とユーフラテス川、そして両者を結ぶ運河を指すと思われます。詩人は度々川辺に行き祈りをささげていたのでしょう。そこでは思い出すのも悔しい出来事があったことも窺えます。「柳の木」(אֵילָנִים／アーラヴ)は「ポプラの木」とも訳せる言葉で、中東の川沿いによく見られるそうです。その木に詩人は「立琴を掛けた」のですが、それは「演奏したくない」という気持ちの表れだったのかもしれませんが。バビロン人の兵士が捕囚民を武器で小突きながらそこへ連れて行き、酒の肴に故郷の歌を歌えと要求してきたことが想像できます。ユダヤの民にとって「故郷の歌」は礼拝賛美そのものでした。それを異邦人の慰み事に利用されるのは、あってはならない屈辱だったのです。

4～6節：エルサレムの懐古

詩人が賛美歌を歌いたい場所は、異邦人の嘲笑の渦の中ではありませんでした。懐かしいエルサレム神殿で仲間たちと共に歌った情景を思い出しながら、ふさわしい賛美の場所を求め続けていたのです。賛美は一人で歌うこともできますが、同じ信仰を持つ仲間と一緒に歌うとき、そこには魂の喜びが共鳴します。賛美は如何なる環境でも歌うことはできますが、やはり礼拝という文脈の中で仲間たちと共に歌う賛美にまさるものはないでしょう。

詩人は、もし自分がエルサレムを忘れるようなことがあれば、「私の右手がその巧みさを忘れるように」(5節)、「私の舌が上あごについてしまうように」(6節)という面白い表現を用いています。これは、立琴を演奏する能力と賛美する声を失うことを意味するでしょう。もちろん彼は、反語的に「絶対にエルサレムを忘れることはない」ことを強調しているのです。

7～9節：報復の願い

「エルサレムの日」とは、エルサレムがバビロンによって陥落させられた日を意味するでしょう。その破壊活動を見ながら高笑いしていた人々がいたようです。「エドムの子ら」とは、元はイスラエル民族と血縁関係にある、ヤコブの兄エサウの子孫のこと。しかし、彼らは通常イスラエルの敵として描かれる傾向があります¹。

兄弟ヤコブに暴虐を働いたので、あなたは恥にまみれ、とこしえに滅ぼされる。あなたが離れて立っていたあの日、他国の者がエルサレムの財宝を奪い、異国の者がその門を突き破り、エルサレムをくじで分けたあの日、あなたは彼らの仲間も同然であった。兄弟が不幸に見舞われる日、あなたはただ眺めていてはならない。ユダの人々の滅びの日、あなたは喜んではならない。苦難の日、大口を叩いてはならない。彼らの災いの日、私の民の門に入ってはならない。あなたはまた、その災いの日、その不幸をただ眺めてはならない。その災いの日、その財宝に手を出してはならない。逃れる者を絶ち滅ぼすために、別れ道に立ち塞がってはならない。その苦難の日、生き残った者を引き渡してはならない。(オバデヤ 10-14)

¹ 民数 24:18、I サムエル 14:47, 48、II サムエル 8:13, 14

破壊される聖都を見るだけでも辛いというのに、傷口に塩を塗るような嘲笑を浴びせるもう一つの民族がいたのです。

詩人の心の叫びは、最終的にはバビロンそのものへと向かいます。「おまえの子どもたちを捕らえ、岩に打ちつける人」（9節）というおぞましい表現は、詩人の発想というより、バビロン人がユダヤの民に対して行なったことを指すのでしょう。当時、戦勝国は敗戦国の幼子を容赦なく殺害したと言われますが、それはその子孫が復讐を企てないためだったと思われまます。

- ・そしてゼデキヤの子どもたちをその目の前で惨殺し、ゼデキヤの両目を潰し、青銅の足枷につないでバビロンに連行した。（Ⅱ列王 25:7）
- ・女たちはシオンで、おとめたちはユダの各地の町で辱められた。高官たちは敵の手でつるされ、長老たちも尊ばれない。（哀歌 5:11-12）

このような酷い仕打ちを目の当たりにし、心に深い傷を負った詩人は、その復讐を神に求めました。

以上、テキストの内容を辿ってきましたが、もう一度最初の問いに戻って考えてみましょう。まず、この「呪いの詩」は「詩人の祈り」であって、彼自身がここで語っていることをそのまま行なうとは言われていない点に注目すべきです。確かに綴られていることばそのものは烈しい炎のような憤りに満ちていますが、詩人は美辞麗句を並べて「心にもない祈り」を神にささげているわけではありません。むしろ、ありのままの自分の思いを神にぶつけ、偽らざる気持ちを丸ごと受け止めてもらいたい一心で叫んでいると捉えることができるでしょう。詩人は、神というお方がこれほどの赤裸々な祈りをも 100 パーセント受け止めてくださることを知っていたのです。

また、もう一つ指摘できることとしては、「おまえの子どもたちを捕らえ、岩に打ちつける人」という表現は、文字通りに捉えるよりも、バビロンがやがて崩壊することの比喩表現とも言えるかもしれません。どんな大国も次に勃興する更に強い国によって滅ぼされます。バビロンの統治期間も限定的であることを、詩人は歴史から知っていたと思われるのです。

本篇とイエス・キリストの福音との調和を試みるならば、以下の聖句を挙げることもできるでしょう。

- ・愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。「『復讐は私のすること、私が報復する』と主は言われる」と書いてあります。（ローマ 12:19）
- ・「復讐は私のすること、私が報復する」と言い、また、「主はご自分の民を裁かれる」と言われた方を、私たちは知っています。（ヘブル 10:30）

十字架上の主イエスも、石で打たれたステパノも、「彼らに罪を負わせないでください」と祈りました。これこそが福音に生きる者の究極の姿ですが、その信仰の領域に至ることに困難を覚える私たちにも、「復讐を神に委ねる」ことはできるでしょう。憎しみの連鎖は主イエスの十字架によってのみ断ち切られるのです。